

高知県獣医師会

近澤 征史朗 先生

SEISHIRO CHIKAZAWA

研究者を経て、 臨床医に戻った私の仕事観



はじめに

私は2025年から日本獣医師会小動物臨床委員会のメンバーとして参加しております、高知県獣医師会員の近澤と申します。同委員会では、小動物臨床領域における獣医師の職域に関する内容について、その企画と運営にあたっております。

私は7年前に高知県内に小さな動物病院をリターン開業した、ごく普通の町医者です。全国の多くの獣医師会員の先生方と同じく、多忙で大きな責任を背負いながら、日々黙々と働いている臨床獣医師の一人です。

私は北里大学を卒業後、一次診療施設の勤務医から大学院に進学、北里大学の臨床系教員を経て開業医になりました。一般的な開業医の中では比較的珍しい経歴だと思っています。このコラムでは、そんな私のキャリア変遷の中で感じてきた、臨床獣医師という仕事の難しさと面白さを率直に書いてみたいと思います。選択肢が増え、多様化する獣医師のキャリア形成について、特に若い先生の参考になれば幸いです。

「飽きない仕事」を求めて獣医師へ

私は17歳の頃「飽きない仕事に就きたい」という理由から、生命科学を扱う仕事の中で、最も裁量権が認められていそうに思えた獣医師を志しました。

当時の私にとって職業選択で最も重要だったのは、「退屈しないこと」でした。興味が広く、飽きやすい性格だった私は、仕事に飽きてしまえば人生そのものが苦しくなると感じていたのだと思います。

臨床現場で感じた違和感

獣医師になって最初に勤務したのは、ご夫婦で営まれていた小さな動物病院でした。

院長先生には大変可愛がっていただきましたが、マニュアルに沿った診療がどうしても苦手だった私は、仕事に適応できず、2年余りで心身の調子を崩して退職しました。

今では、診療のマニュアル化が病院経営やリスク管理のために重要であることは理解できます。しかし当時の私には、診療

が作業になっていくように感じられました。

私は常に、

「なぜ、それを行うのか」

「なぜ、それを行わないのか」

を自分自身で説明できなければ行動できない性格でした。

臨床には、マニュアルだけでは説明できない「余白」があります。その余白を受け入れるだけの思考が自分には足りないと感じ、私は研究の道へ進む決断をしました。

研究が教えてくれた「問い続ける力」

その後、大学院生から大学教員として約10年間、北里大学で教育・臨床・研究に携わりました。

研究者として飛び抜けた業績を残したわけではありませんが、多くの先生方や学生との出会いに恵まれ、自分なりに納得できる時間を過ごすことができました。

振り返れば臨床医としては遠回りだったかもしれませんが。しかし私には、研究という経験があったからこそ、本当の意味で

「飽きない仕事」として臨床を続けられているのだと思います。

研究思考は臨床にも生きる

研究とは、自分の中に生まれた「問い」を検証し、それを他者へ言葉で伝える営みです。

臨床とは異なり、すぐに答えを出す必要はありません。疑問を抱えたまま、多様な考え方を受け入れながら思考を深めることができます。

診療は、毎日のように「分からないこと」と向き合う仕事です。

若い先生の中には、その不確かさを自分の知識不足だと考え、さらに知識を増やそうと悩む方もいます。

もちろん知識は重要ですが、臨床では知識だけでは解決できない場面も数多くあります。

私は、研究思考とは、そうした「不確かさ」と付き合う技術でもあると考えています。

問い続けることが臨床医を支える

高校生だった私が求めていた「飽きない仕事」とは、正解が一つではなく、問いを持ち続け、考え続けられる仕事だったのかもしれない。

研究者として過ごした時間は、その思考を鍛える訓練でもありました。

「答えを急がなくてもよい」
そう思えることは、臨床現場に少しでも心の余白を与えてくれます。

この余白こそが、忙しい臨床医にとって、とても大切な技術なのではないかと私は感じています。

